
学校の不良JKし

クルーボン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校の不良❄し

【Nコード】

N9913P

【作者名】

クルーボン

【あらすじ】

一刀桂木は不良に苦しみながらも楽しい高校生活を送っていた。だが、後輩の有江と共に野球部の部長から暴行を受け、有江は楽しみにしていた最後の文化祭に出られず帰国。

怒りに奮えた一刀は復讐計画を実行する・・・。

第一章 放課後（前書き）

まだ荒書きですがよろしく。

第一章 放課後

電車から降り、駅に止めてある自転車で学校へ向かう。今乗っている自転車は姉のお古で小学校の時に乗っていたものだった。ハンドルとカゴと椅子以外は真っ黄色で所々模様が剥がれ落ちている。一番のチャームポイントは椅子に付けられているハートマーク。姉のお古だから仕方が無いが、こんなもの同級生に見られたら確実に嘲笑の的になるだろう。

早めに学校に来たのは理由がある。

自校の自転車置き場のスタンドに止め早急に鍵を締めてクラスに向かって行く。だが、少し遅かったらしい。

「おい、一刀」

声を掛けてきたのは校舎の玄関で座りながらだべっている連中が鷹山グループ。いわゆる（不良）という奴だ。この連中に目を付けられたら高校生活が終わりと思っていい。

「金」

「はい」

一刀は制服のポケットから財布を取り出し1000円札を二枚渡した。

「なんだテメー、2000円しかねえのか」

「すみません。貧乏なもので・・・」

鷹山は吸っていたタバコを道に投げ捨てた。返事が無い、ということとは行ってもいいという事だ。

一刀はシューズに履き替えクラスに向かった。

また、金を取られてしまった……。ただどあれは賢明な判断だと思う。下手に逆らったら何をされるか分かったもんじゃない。ああいう連中は適当に従っておけば良い。卒業したらもう無関係な人間なのだから、ああいう屑には金という餌でも渡しておけば良い。

一刀は鷹山の叫び声を聞いて後ろを振り返った。

「おおい！！財布持ってきてねえのか！ああ？」

「・・・・・・・・すみません・・・・・・・・」

可哀想な奴。久しぶりに学校に来たのにあんな屑にからまれて。

一刀は財布を取り出し玄関へ向かった。

「あのさあ、お前の事嫌いじゃないけどさ。調子ノってつと殺すよ？モデルだからってなめてんじゃねえぞ！」

鷹山が角川結衣の前髪を鷲掴みにした。女子にも手を上げてやがる・

「・・・」

「鷹山さん、これ」

財布から取り出した3000円を鷹山に差し出した。

「この女の代わりか？」

はい、と言いかけるとグループの一人が指を指して言った。

「でもさっきお前もう金ないって言ったよな!!」

なあ！　とそいつがメンバーに賛同を求めると反感の声が次々に上がる。

「・・・すみません。やっぱ探したらありました」

鷹山が金を受け取り、手を髪から話すと、角川はバッグを持って一目散に走り去って行った。

だがそれでも鷹山は納得しなかった。

「お前明日10万持ってこいや」

ゲームでも買おうと思って持ってきた5000円はパーになり、それでもまだコイツは金を奪い取ろうというのか。

「つべこべ言わず持ってこいやああ！」

足蹴りを腿にくらい痛みของあまり座り込む。それから二、三度暴行を受けた。

「わ、分かりました分かりました。持ってきます」

「へっ」

チャイムが鳴り、行き間際に唾液を一刀に吐き出し去っていった。頭に一気に血が昇り鷹山を殴り倒そうと瞬発的に立ち上がると、

「う、」

腿に激痛が走り足を押さえながら不恰好に座り込んだ。玄関前の廊下を教師が歩いて来たが、横目で一刀を見てから何も無かったかのように持ち場のクラスへ行ってしまった。

何なんだ、コイツらは。

アンタらは給料さえ貰えればいいのか。

不良を黙らせる事さえも出来ないのか。

テメェらそのままでもいいのか。

敗北感と屈辱感に襲われたが一刀は何もする事が出来なかった。

・・・六時限目の授業が終わり、教師はすごすごと教室を去っていった。

「・・・あの」

自分の机の横に角川結衣が立っていた。女の子に話しかけられたの何日ぶりだろう。

「・・・あの！」

「聞ってる聞ってる」

さっきのお礼でもしにきたんだろう。角川が少し音量を上げたせい

か、クラスメイト数人がこちらを振り返った。それに角川は週刊誌の人気モデルなのだ。何処か目線が痛いような気がする。

「朝の時はありがとうございました・・・逃げちゃってごめんなさい・・・」

「・・・うん、気にしないで」

「・・・え？」

マズイ、聞こえなかったらしい。慣れて無いせいか女の子と話すと妙に緊張する・・・。

「・・・気にしないでいいよ。ハハ・・・」

「あの、お金大丈夫ですか？」

お金。ゲーム代5000円。

「ああうん・・・。大丈夫、だよ、たぶん」

これ、と3000円を一刀に差し出してくる。・・・ていうか金持ってたんかい。

いらないと両手を顔の前で振ると、彼女はニツコリと笑った。

「一刀君、優しいんですね」

一気に顔が熱くなる。これだけはなかなか治らない・・・。

「じゃあもう私行きますね」

「今度からは早めに来るといいお・・・いいよ。からまれる確率低くなるから」

分かりました！ と元気に言い、帰り際にバイバイと手を小さく振って去っていった。

・・・オレ学校来て良かった。・・・うん。

この学校も鷹山のような不良さえいなければ、もっと楽しい学校生活を送れるに違いない。

いや、間違いない。

○第一章 放課後

放課後は部活動に入っている奴は部活に向かい、そうでない奴は帰るというだけだ。一見帰宅部に思われがちだがちゃんと部活動には入っている。

一刀は茶道部のドアを開けた。

「あ、先輩」

「ちゃんとお茶作ってる？」

有江はにやりと笑った。

「いつもだべってるだけじゃないですか」

その通りだ。担当の先生が入院してから誰も代わりが来ないものだ

から、いつもただだべって部活終了という感じだ。まあ、その方が
良いけど。

「先輩！これあげます！」

一刀はバッグを投げると畳の上にあぐらをかき、有江と反対方向の
位置に座った。そして有江は少し興奮ぎみに一刀に札束を手渡した。

「何これ札束？」

「印刷してきました」

少し自慢気に言ってくる。

「・・・こういうのやっちゃダメだろー・・・」

「いいんですよ。きっと。バレなければ」

「・・・オレを犯罪者にするつもりデスカ？」

先輩の為にやってきたんですよ、と言いながら髪の毛を耳にかけた。

「それですね、鷹山達に使うんです」

「さすがにバレるだろ・・・」

そう言う和有江は ビシィ！ と一刀を指差す。

「それをどうにかするのが先輩じゃないですかッ！！」

「なっ、なんと無責任なッ！」

「・・・先輩、私信じてます。きっと・・・生きて・・・帰って来るって・・・」

「暇な奴」

呆れた様に溜め息をつくとしョックを受けたのかしョボンと下を向いた。

「だって・・・私帰国するの後ちよっとなんですよ・・・？」

「だから？」

「ひどい！私中国に行ってしまうというのに！先輩は悲しくないんですか！」

随分とヒステリックな言い回しだ。

「この悪魔！人でなし！不潔大魔神！」

「・・・不潔大魔神！？」

こうなったらもういつものノリで髪をワシワシと撫でてやる。そうすると嬉しそうに笑うのであった。

「髪撫でて嫌がられないの初めてだよ」

「帰国するまでのサービスですよ」

そうか。こいつは文化祭が終わって少ししたら中国に帰ってしまうのか。学校に来るのがさらに嫌になりそうだ・・・。

続きます

第一章 放課後（後書き）

続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9913p/>

学校の不良✕し

2011年1月12日23時39分発行